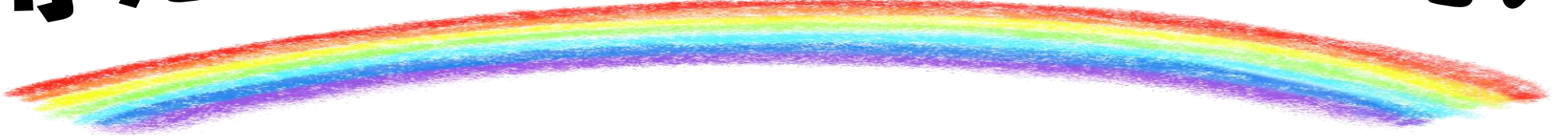


小児・AYA世代のがん経験者の思い



小児期、AYA 世代（15 歳～30 歳代）にがんを経験した方の交流会を行いました。

◆ 「なんで私なんだろう。」と思い、親のいないところで泣いた。

その思いを母に伝えたら「神様は乗り越えられる試練しか与えない。あなたなら病気を乗り越えられると思って神様が試練を与えたんだよ。」と言われ、頑張ろうと思えた。

◆ 入院中、地元の学校の学習の進度がわからずとても不安だった。

治療の合間の限られた時間に一生懸命勉強した。「みんなから遅れたくない。」とすごく焦った。親友には悩みや思いを打ち明けることができ、手紙のやりとりが救いだった。

◆ 進路のことで、家族から「体力が必要。大丈夫なの？」と反対され、悩んでいる。

進路を決める時にどんな努力や覚悟をして進んでいったのか聞きたい。

◆ ハンデを理解してもらうため、自分から周囲に説明した。

仕事上、身体にハンデがある。自分のハンデを伝えることは、恥ずかしい気持ちもあったが、言わないでわかってほしいというのも難しいので、こう工夫すればできるなど、同僚や先輩と相談しながら乗り越えてきた。

◆ 採用面接で、義眼であることを理由に扱いが変わり、悔しい思いをした。

いつか見返してやろうとひたすら勉強し、資格を取得し、やりたい仕事に就いた。

◆ 将来の妊娠・出産への影響について説明してほしかった。

中学生だった発症当時は、妊娠や出産のことまで考えられず、自分から医師に聞いたりはしなかった。現在、20 歳代になり、妊娠や出産など将来のことを考える年齢になり、当時、生殖機能温存治療（卵子保存等）ができたのであれば、受けたかったなと思う。罹患年齢や発達段階に応じた将来を見据えた説明や支援をしてほしい。

◆治療の影響で、免疫力が低く病気にかかりやすいなどの合併症がある。

感染症等の病気にならないよう日頃から気を付けている。また、白内障で黒板の白いチョークの文字がぼやけて見ずらいため、前の席で授業を受けている。

◆当時は中学生。訳も分からず入院・手術で、親に当たることもあった。

今ならば仕方ないと思える。

◆小学生の時、退院後にいじめられた。何気ない悪気のない言葉に傷つく。

子ども達が、がんについて知ることができる機会があると、闘病を頑張っている子ども達が、学校に復帰しやすくなると思う。

◆小児がんのことをもっと知ってもらいたい。

レモネードの会など、小児がんのことを知ってもらうための会に参加し、同年代でがんを経験した仲間と出会うことができた。

◆子どもに病気のことを伝えることで、暗くなってしまわないか心配だった。

「悪いところをとってくる、頑張ってくるね。」と子どもに伝えた。看護師もフォローしてくれ、抗がん剤で髪が抜けてしまった時も、明るく説明してくれた。子どもにももらった手紙を病室に貼って励みにしていた。家族みんなで頑張っている。

◆初めての乳がん検診で、がんが見つかった。

会社の健康診断のオプションで検診を受け、乳がんが見つかった。病気を経験した人にしかわからない気持ちがあると思い、交流会に参加した。

◆同じ年代でがんを経験した仲間と共感できることに嬉しさを感じた。

同年代でがんを経験した仲間と経験を共有できたことで、気持ちが軽くなり、貴重な時間だった。

栃木県では、今後も交流会の開催を予定しています。

他の経験者と話してみたい、悩みや気持ちを共感できたら・・・という方など、ぜひ御参加ください。



【お問い合わせ先】

栃木県保健福祉部健康増進課

TEL：028-623-3086